

高村峰生 著

▶触れることのモダニティ

ロレンス、スティューグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ
2・27刊 A5判318頁 本体3200円
以文社

「我に触れるな」の禁令に対峙する、 美的現代性の桎梏

視覚性から触覚性への転回へ

稲賀繁美



ノリ・メ・タンゲレ「我に触れるな」とは、復活したイエスが、その体に触れようとしたマツダラのマリヤに対して発した言葉として知られる。この文句を何度か作品に引用しているD.H.ロレンスは、フィレンツェ近郊の丘陵、フィエーソッレに滞在し、最晩年に『エトルリアの故地』(1927)を残す。ムッソリーニが「握手の衛生的」との理由で導入したローマ式敬礼は、実際にはフランス新古典派の画家ダヴィッドの《ホラティウス三兄弟の誓い》に由来し、ダヌンチオ脚本の叙事詩映画《カピリア》(1914)などで普及したという。ロレンスはこのファシスト党の「接触忌避」とは対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテラコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画にも見出す。画家の「リンゴ性」(appleanness)の追求は当時の通念から「不潔」で「不道德」との批判を招く。そうした「潔癖さ」の触覚忌避に潜む「偽り」を訴

えるのが、noli me tangereの禁令を破ろうとするロレンスの生命の「倫理」だった。手仕事 Handwerk の残す痕跡は触覚と無縁でないが、ヴァルター・ベンヤミンにとって、経験の伝達には触れることと Mangeln が存する。そのベンヤミンは写真や映画といった複製藝術が作り手の「手を開放した」一方で、ダダイズムや映画に代表されるメディアは作品を鑑賞者に接近させる限りで「触覚的」(taktilisch)と呼ぶ。ただしこの語は通常は「戦術的」の意味。そう主張する著者は、ベンヤミンへのアロイス・リーゲルやルードウィヒ・クラウゲスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型 Urbild へと現象するとするクラウゲスの説を、故郷への憧憬が詩の韻により触知的に体験されることとみるベンヤミンの議論に重ね合わせる。日本でいへば折口信夫の「憧憬」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源 Ursprung に触れる

まじ。『純粋言語』とは根源

「根源への志向は生成と消滅から発生する」と説くベンヤミンの翻訳論には、私見ではカバラーの地下を無視でき

「根原」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源 Ursprung に触れる

タブー、根原からの疎外が「均質な時間としての歴史」という欺瞞の生成(Entstehung)と表裏をなすとの認識である。元来アウラとは息吹であるが、均質な時間が支配する「普遍史」は「アウラの風のそよぎを殺し、機械的な模造複製 Abbild を量産する。ロレンスのファシスト忌避が、このベンヤミンのナチズム批判と平仄を合合わせる。ナチス政権の訴える「非常時」とは、接触を奪奪する統制を手段とした絶対覇権の掌握・貫徹なのだから。

さらにベンヤミンの「翻訳者の使命」では、田の接線という比喩が語られる。原作という円に翻訳が接するのは無限小の接点におけるほんの一瞬间の出来事「すぐにも逃げる接触」(Flüchtigster Berührung)に過ぎず、そこには未来へと吹き飛ばされ、後退しながら過去の廃墟へと視線を投げけるかのパウエル・クレーの作品から靈感を得た「新しい天使」の姿も重なっている。Bausten が能動態の「触る」(berühren)は受動態というよりも中動態の「触れる」に相当する。ドイツ語についてはハイネカーに、日本語については坂部恵(増田一夫)によるフランス語に翻訳された論文に精緻な議論があった。翻訳はいかに原史(Originalgeschichte)に触れるのか、否か。

このイメージ Bild はあたかも唯識が説く瀑布に落ちる水流を思わせる。滝の水音は永遠に更新される瞬時だが、それは翻訳の営みにおいて「アウラの風に触れて鳴るから」。

風琴と化す。翻訳は交通 Verkehr だが、交通は比喩 metaphor の語源でもあった。生々流転はクラウゲスがヘラクリトスから引用する万物流転でもあり、時の後先を捻転する anachronism は「比喩」として輪廻転生に接して「翻訳」できよう……。英文博士論文の和訳に基づく著作の第一章と第三章に触れて私見を挟んだ。スティューグリッツとその周辺を分析する第二章は、「接触」の比喩の奔流に身を振らせる。またモーリス・メルロ＝ポンティのキアスム(Chiasm)を扱う最終章は、禁忌に生じる受動と能動の蝶番(articulation)と裂開(écart)を軸に、創作における時間性の表現(représentation)をセザンヌとブルーストに接しつつ展開する。過去との偶発的な触知的遭遇(communication)の議論は、さらに九鬼周造などを触媒にする可能性をも秘めている。

英語圏の研究事情に強い著者が、この先日本の事例にも触れつつ、さらに様々な接触圏に触角を伸ばされんことを期待したい。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学)